

## 映画主題歌「祇園小唄」考

大西 秀紀(レコード収集家)

E-MAIL ban-jin@ya2.so-net.ne.jp

## はじめに

マキノ映画『祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖』の主題歌である『祇園小唄』は、昭和5年の日本ビクター1月新譜として発表された。以後73年の歳月を経た現在では、映画の存在はすっかり忘れられた感があるが、——月はおぼろに東山——で始まるメロディーは今なお人々に愛され、京都の唄の代表として揺るぎない地位を築いているといえるだろう。本稿ではまず『祇園小唄』成立以前のレコード事情、続いて作品としての『祇園小唄』およびその発売後の反響について検証し、この曲がもたらした影響について考察を進めていく。

## 1. 『祇園小唄』以前

## 1-1. 昭和初期のレコード事情

昭和に入り、我が国のレコード業界は大きな変革期を迎えた。コロムビア、ビクター、ポリドールといった外資系企業が相次いで設立され(この内コロムビアは明治以来の日蓄の延長)、業界の勢力分布が変わると同時に、マイクロフォンを使った電気吹込みが導入されることにより、従来のラッパ吹込みよりもはるかに明瞭な録音が可能となった。従って内容の優劣にかかわらず、音質的に劣る明治・大正期に蓄積されたソフトは商品的に通用し辛く、これらを抱える旧来のレコード各社も新規参入企業同様に、昭和の商品を新たに作る必要に迫られた。

これまでのレコード各社のカタログの内容は、音楽・演芸・演劇等のジャンルに拘わらず、その殆どが既に世間に在ったもので埋められており、レコー

ド会社自らが内容を企画・制作するという姿勢は希薄であったといえよう。しかし設立間もないビクターより昭和3年4月に発売された『波浮の港』や、昭和4年1月に発売された『君恋し』が予想外に大ヒットすることによって、各社は流行する唄を作り、世の中に送り出す姿勢に転じた。これまで演歌師が街頭で唄い広めた「はやりうた」ではない、企業発の「流行歌」時代の幕開きである。すなわち作詞・作曲・編曲・歌手・演奏家に専属のスタッフを揃え、プロデュースと販売にそれぞれ文芸部・営業部を設けることにより、音楽産業を担う企業としての体制を整えたのである。<sup>(1)</sup>

## 1-2. 映画主題歌と地方小唄

戦前に発売された流行歌レコードの総目録的資料ともいえる、福田・加藤編『昭和流行歌総覧 戦前・戦中編』(柘植書房、1994)で『祇園小唄』発売前後である昭和4～5年の各社の発売リストを見ると、掲載曲合計927曲中映画主題歌と地方小唄(あるいは曲名に地名のあるもの)が418曲。流行歌新譜の5割近くが、これらのジャンルで占められていることがわかる。

映画主題歌の第一号は『東京行進曲』(昭和4年6月発売、西條八十作詞、中山晋平作曲、唄・佐藤千夜子、ビクター50755)であるとされている。雑誌『キング』連載中の菊池寛の長編小説を映画化するにあたり(『東京行進曲』日活太秦作品/監督・溝口健二/出演・夏川静江、入江たか子、小杉勇、島耕二、他/昭和4年6月)、日活宣伝部長・樋口正美が西條八十に作詞を依頼した。流行した唄を題材にした、いわゆる「小唄映画」はこれまでに度々作られていたが、映画のために新しく主題歌を作るといふ、映画とレコードの新たなタイアップの図式がこ

こに生まれたのである。<sup>(2)</sup>この曲は当時としては異例の30万枚を売り上げたという。<sup>(3)</sup>

いわゆる「ご当地ソング」である地方小唄(新小唄・新民謡と呼ぶ場合もある)は、大正12年長野県須坂町の山丸組製糸会社の女工唄として作られた『須坂小唄』(野口雨情作詞・中山晋平作曲)を皮切りに、観光のPRソングや地域の催し用として、各地の観光協会・新聞社・電鉄会社・市町村等の協賛を得て、続々と生み出されていた。<sup>(4)</sup>これらは既に各地で発表されたものを、レコード各社が順次取りあげていった感が強いが、何よりも各地の協賛団体のバックアップによる確実な売り上げを見込める事が、営業上の大きな魅力であったと思われる。『三朝小唄』『須坂小唄』『龍峡小唄』『ちゃつきり節』『天龍下れば』などが地方小唄のレコードとして代表的なものである。<sup>(5)</sup>

レコードカタログの大きな柱として迎えられた地方小唄は、当初は文字通り地方都市にまつわる唄がほとんどで、東京・大阪といった大都市の唄のヒット曲は多少遅れて登場する。前記『東京行進曲』は映画主題歌でありながら、同時に東京のご当地ソングとしても大ヒットしたといえよう。一方大阪ものとしては、昭和3年4月に『道頓堀行進曲』が、続いて昭和4年7月に『浪花小唄』が発表され、大ヒットした。しかしこの頃京都を唄った曲は『伏見小唄』(昭和4年12月)が見られるくらいで、ヒット曲といえるものはまだ生まれていなかった。

### 1-3. レコード発売から流行への道程

レコードと映画がタイアップすることにより、作品のPRも互いに協力し合うようになる。レコード会社は映画名と主題歌のナレーションを入れたPR盤を製作し、全国の映画館の幕間に流させた。また映画会社は美麗ポスターをレコード会社に配布し、レコード会社ではこれに主題歌の宣伝チラシを貼付け、自社の特約店の店頭貼らせた。また販促活動は会社レベルからさらに末端に広がった。レコード店は新譜のサンプル盤を映画館に貸し、映画館は割引券や招待券をレコード店に提供した。客はレコードを買えば映画を安く見ることができ、また映



図1. 『祇園小唄楽譜』ビクター出版社、1930、(個人蔵)

画に行けば幕間に新譜が聴けるサービスを受けられるわけである。また映画館の外へも間断なく上映中の映画の主題歌を流し、集客に努めたようである(3-1参照)。

もうひとつ当時のレコード以外の流行歌の伝播方法として見逃すことができないものに、楽譜の存在がある(図1)。大ヒットした『浪花小唄』の楽譜について、その作詞者の時雨音羽が次のように振り返っている。

筆で書くとスピーディだが、そのころと今とは宣伝、販売などまるっきり違っていて、当時は今のように、二、三か月でヒットになるということはない。テレビやラジオが活躍している現代と違い、一つの歌が全国的に行き渡るには相当期間がかかった。まずレコード化されて、見込みのありそうなものは楽譜にする。この楽譜もハーモニカ風のピースとピアノ風のもの二種にわかれ、いずれも最初千部から二千部印刷される。このハーモニカ用のものに人気が集まった(ハーモニカ用は十銭、ピアノ用は二

十銭、レコードは一円から一円二十銭)。ハーモニカ用楽譜はまず若いハーモニカ愛用者の、若人たちの手に渡る。

レコードよりもハーモニカで評価が決まるのである。このハーモニカ楽譜がどれくらい売れたものか十五万を売りつくしてから、版を何度もつぶしたというから、何十万部か想像もつかないほど売ったようだ(後略)。(清島利典『日本ミュージカル事始め』(刊行社、1982、291-292頁))

## 2. 映画主題歌『祇園小唄』

### 2-1. その成立について

マキノ映画『祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖』が作られた経緯に関しては、監督であった金森万象の回想録「映画今昔(28)~(32)」『消費者自身』(日本生活協会、1973)に詳しい。この第28回に主題歌『祇園小唄』のレコードに関する次のような記述が見られる。

(前略)その頃の各社の作品にテーマソングを添えることが多く流行っていた。それに時を同じくして溝口健二監督が梅村蓉子を主演とした「唐人お吉」を製作中だったが、それにも「思い出しますお吉の声を……」と歌い出す明烏篇と黒船篇との二つの歌があった。それで私もこの映画「繪日傘」に主題歌をと思い飯田氏(高島屋の御曹子の飯田新三郎、マキノ映画の後援者であり、長田幹彦とも親交があった一引用者註)を通じて長田氏に頼んでもらった。そして出来たビクターから送られたレコードのラベルには「マキノ映画繪日傘主題歌祇園小唄」と金文字で印刷されていた。それで映画は繪日傘だがその時主題歌をと私が言わなければ祇園小唄は出来なかったと思う(以下略)。

同じ回の「映画今昔」によれば、映画『繪日傘』は昭和4年秋製作に着手したとある。前掲書『昭和流行歌総覧』を見ると、『東京行進曲』以降、映画(特に日活・松竹作品)に関係した唄の発売は月を



図2. 二三吉『祇園小唄』(ビクター51037)

追うごとに増え、『祇園小唄』発売の前月までに27曲が発売されていることから、映画主題歌は時流に乗り始めたことが分かる。また原作者の長田幹彦は当時日本ビクターの文芸顧問の職にあり、金森が長田に主題歌の依頼を考えついたのも当然の流れであったといえよう。

この曲について、後に長田自身は次のように書いている。

(前略)歌は二時間ばかりでできたがその時分専属だったビクターへもっていくとすぐ佐々さんのところへ廻された。これは曲がつけいい歌詞だからというので佐々さんはすぐにピアノの前へ坐ってあの曲を巧みにひいた。ぼくは予想外だったのでびっくりしてしまった(以下略)。(長田幹彦「「祇園小唄」の話」『ぎをん 第二号』祇園甲部組合、発行年不詳)

金森の願いは受け入れられ、映画主題歌『祇園小唄』は日本ビクター昭和5年1月新譜として発売された(レコード番号51037 図2)。作詞は長田自身が担当し、作・編曲は『新銀座行進曲』『君恋し』『神田小唄』『浪花小唄』などのヒット曲を次々に発表していた佐々紅華。唄は当時売れっ子であった二三吉という強力なメンバーによるものであった。これら三人は奇しくも東京生まれの東京育ちであり、ビクターもまた東京の企業である。このことは好むと

好まざるとにかかわらず、『祇園小唄』の作風にも  
自ずから反映されることとなった。

## 2-2. 『祇園小唄』の構成

『祇園小唄』の歌詞は4節から成り、24小節のメロ  
ディーによって繰り返される。二三吉盤は10インチ  
SPレコードの表裏にそれぞれ2節ずつ吹き込まれて  
おり、レコード全体の構成は次のようになっている。

【表】3'16" 伴奏:三味線主体の和洋合奏

1. 前奏部——10小節
2. 唄(春):月はおぼろに、東山——24小節
3. 間奏部1:唄と同じメロディー——24小節
4. 間奏部2:1と同じ——10小節
5. 唄(夏):夏は河原の、夕涼み——24小節

【裏】3'14" 伴奏:弦楽主体の和洋合奏

6. 前奏部——10小節
7. 唄(秋):鴨の河原の、水やせて——24小節
8. 間奏部3:唄と同じメロディー——24小節
9. 間奏部4:6と同じ——10小節
10. 唄(冬):雪はしとしと、まる窓に——24小節

一曲をレコードの表裏に同じ歌手が続けて吹き  
込む例はこれまでもあったが、『祇園小唄』の場  
合は、表は三味線伴奏のお座敷での踊り用に、裏  
はオーケストラ伴奏で流行歌風という意図で、そ  
れぞれ編曲を変えている。これは当時としては新し  
いアイデアであったようだ。<sup>(8)</sup>

表面の伴奏は三味線・ピアノ・フルートを主体と  
した和洋合奏で、上記1・3・4には祇園囃子の鉦が  
入り、2・3・4には小鼓がリズムを刻んでいる。ここ  
でのピアノは単音でメロディーを弾くという役割で、こ  
の時期に多く録音された「ピアノ入り」端唄・小唄の  
レコードと同じ手法である。裏面の伴奏はこれとは  
打って変わって洋風となり、バイオリン・チェロ・アル  
トサックス主体の和洋合奏だが、三味線はリズムパ  
ートに回った感がある。7・10では弦のピチカート、8  
ではシロホンによるオブリガートがそれぞれ付く。随  
所に散りばめられたグロックンシュピールの音が効  
果的である。全体を通じて、新内の『流し』における  
二丁三味線に想を得たかのような編曲といえよう。  
同時期に佐々が作・編曲した『唐人お吉の唄 明

鳥篇』(ビクター51093, 前記2-1参照)は、明らかに  
新内風に編曲されており、『祇園小唄』もそれと共  
通した発想の元で生み出されたと考えられる。

## 2-3. 『祇園小唄』に描かれた世界と長田幹彦

京都の四季おりおりの風情を歌い込んだものと  
しては、第一に端唄『京の四季』が思い浮かぶ。歌  
詞は次の通りである。

春は花、いざ見にごんせ東山、色香あらそ  
ふ夜桜や(合)うかれ／＼て粋も無粋も物がた  
い(合)二本ざしでもやわらかう、祇園豆腐の二  
軒茶屋、みそぎぞ夏はうち連れて、川原につ  
どふ夕涼み、よい／＼／＼／＼よいやさ。(合)

真葛ヶ原にそよ／＼と、秋は色ます華頂山、  
時雨をいとふ傘からかさの、濡れて紅葉の長楽寺  
(合)思ひぞ積る円山の、今朝も来て見る雪見  
酒、エ、そして櫓(9)のさしむかひ、よい／＼／  
／＼よいやさ。(合)

東山の夜桜、加茂川の夕涼み、華頂山の紅葉、  
円山の雪を詠み込んだ名曲であり、京舞井上流に  
とどまらず、多くの流儀による振り付けがなされてい  
る。<sup>(11)</sup>『祇園小唄』も構想上近代版『京の四季』を狙っ  
たと思わせるところが随所にあり、とくに前奏部最後  
の2小節のメロディーに、『京の四季』の前奏を取り  
入れているのもそのひとつである。しかし『祇園小  
唄』が『京の四季』と大きく異なるところは、各節の  
最後を「祇園恋しや、だらりの帯よ」の詞章で締めく  
くっている通り、唄の主題を舞妓に固定した点であ  
る。祇園の舞妓は数多くの絵画にも描かれ、京の  
美しきものの代表として広く親しまれた存在である  
が、歌詞の中にたたずむその姿がもたらす色彩的  
効果は極めて高いといえよう。そして「しのぶ思いを  
振袖に」「かくす涙の口紅も」「燃えて身をやく大文  
字」「泣くよ今宵も夜もすがら」といった、悲恋を想わ  
すようできて必ずしも脈絡があるものとは言い難い  
が、ドラマ性のある詞章で具体的なポイントにズーム  
イン・アウトすることにより、あたかも美しい絵はが  
きを見せるかのように、聴く者に視覚的イメージを  
与えている。

長田幹彦(1887.3.1-1964.5.6)は文壇デビュー直後の明治45年4月より谷崎潤一郎と祇園に遊んだ。そしてその世界に材を採った『祇園』『祇園夜話』『鴨川情話』などを大正初期に次々と発表し、同じく祇園を歌った吉井勇『祇園歌集』などととも(14)に一世を風靡することとなった。

長田のこれらの作品には、繰り返し丹念に濾過されたような、美しく濃密な詩情が共通して流れている。これらの世界は当時の祇園の風俗を克明に描写しながらも、むしろ現実の花街の喧噪や嬌声やそれらを取り巻く俗悪な欲望から意識的に逃避したかのようであり、長田が独自に作り上げた「祇園」の世界であるといえよう。

作詞家としての長田の仕事は大正初期に『不知火の歌』(東京蓄音器1389)が確認できるが、いつ頃から始まったのかは現段階では不明である。『長田幹彦全集 別冊』(非凡閣、1936)の歌謡篇には、勝太郎による大ヒット作『島の娘』をはじめ196曲の歌詞が収録されている。そのジャンルは流行歌・映画主題歌・地方小唄・軍歌・応援歌・清元・他と多岐に渡り、正に職人芸の感がある。

#### 2-4. 佐々紅華について

作曲の佐々紅華(1886.7.15-1961.1.18)は昭和2年12月に設立直後の日本ビクターに入社した。当時の佐々は、西洋音楽のレコードによる普及、それも単に海外からの直輸入ではなく、ジャズの軽快なリズム・メロディを日本風に育てるという理想を抱いていたとい(15)う。前記『君恋し』(昭和4年1月発売、ビクター50559)も軽快に刻まれるジャズのリズムに乗った、これまでにないタイプの流行歌として大流行した。ビクター以前の佐々は、まず設立間もない日本蓄音器商会(日本コロムビアの前身)にデザイナーとして入社したが、大正2年に東京蓄音器に文芸部長として招聘され、この時多くのお伽歌劇や童話劇のレコードを残している。大正6年に東京歌劇座を組織し、以後七声歌劇団、根岸歌劇団等に参加。いわゆる「浅草オペラ」の解散まで、常に歌劇活動と行動を共にした。我が国の大正期洋楽史のキーワードとなる人物の一人といえ(16)よう。

『祇園小唄』はこれまでの佐々の作品とは異なり、しっとりとした日本調である。しかし同時期ライバルであった中山晋平による「晋平節」の哀切感とは違う、どこか「軽み」のあるあか抜けしたメロディーになっている。

### 3. 『祇園小唄』の反響

#### 3-1. 街の反応

映画『祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖』はヒットしたようだ。金森は次のように書いている。

映画館は連日の大入満員を続けて第一、第二第三話は各一ヶ月の上映の後、この三編を一時に「繪日傘大会」としてまた一ヶ月のロングランとなり、その明間中館の前にレコードの祇園小唄を流したので客足の絶えることなく歌は大流行、撮影所の危機も完全に解消したのである(以下略)。(『映画今昔(29)』『消費者自身』(日本生活協会、1973.7))

当時マキノは火災焼失の損害による資金繰りの悪化に加え、前年夏に創業者マキノ省三を失い、大きな経営危機に直面していた。映画『祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖』はマキノにとっての正に救世主であったようだ。またこの成功の陰には、『祇園小唄』のレコードも集客に大いに貢献したことがわかる。また「京の春①」(『大阪朝日新聞』昭和5年3月19日)と題した街頭スケッチ記事の冒頭は「卅六峰の薄霞に一／加茂河原の緑に一／春宵の尖端に踊る／祇園小唄のメロディ」という見出しとともに、次の一文で始まる。

大観描く東山三十六峰の薄墨に加茂河原の緑がスーッと一はけとけて流れて、三千七十六ヶ寺お彼岸の鐘は京の都に春を告げた、わけても四条新京極の夜は官能の春の尖端として街灯のダイヤ型はピンク色の媚笑をひろげ、レコードの針先にふるへるのは祇園小唄のメロディだ

“白い襟足雪洞の／かくし涙の口紅も／燃えて身を焼く大文字／祇園恋しやだらりの帯よ”  
一切のカフェーとラヂオ屋の店先と丁稚階級

との口笛とを動員して京ブラの足どりをリズムカルにしてゐるのはこの唄だ(以下略)

レコード発売から三ヶ月、当然映画はまだ上映期間中であるが、早くも主題歌が映画を離れて一人歩きを始め、まだ肌寒い京の春と結びついてしまったかのようで興味深い。いずれにせよ『祇園小唄』には即効性の浸透力があつたことがうかがえる。

### 3-2. レコード業界の反応

ヒット曲が生まれるとその類似曲が続くのは、何時の時代も変わらぬ現象である。逆に類似曲の数から本歌の人気を推測できるともいえよう。ここでは、A・全部あるいは一部に本歌(ビクター51037)と同じ歌詞・メロディーを使ったもの、B・曲名が類似しているもの、C・歌詞及び曲調が類似しているもの、として、以下の7曲を確認した。Cのパターンは他にも多数あるが、紙数の都合で1曲の紹介のみに止めた。

- i-B 『祇園小唄』 杉山長谷夫作曲 唄・葎町二三吉 コロムビア25803 昭和5年4月
- ii-B 『新作祇園小唄』 唄・岩田正 ショーワ878 昭和5年頃?
- iii-B 『祇園新小唄』 唄・南地金龍 タイヘイ3050 昭和6年7月
- iv-A・B 『新祇園小唄』 長田幹彦作詞 町田嘉章作曲 唄・二三吉 ビクター52349 昭和7年8月
- v-A 『祇園恋しや』 長田幹彦作詞 唄・市丸 ビクター52696 昭和8年6月
- vi-C 『祇園ながし』 歌島花水作詞 宮本啓一作曲 唄・幾松 タイヘイ4450 昭和9年4月
- vii-A・B 『新祇園小唄』 南風原朝成作詞 佐々紅華作曲 唄・藤本二三吉 コロムビア27824 昭和9年5月

i は未見であるが、本歌の発売から3ヶ月後に同じ二三吉が同名異曲をライバル他社から出している点に注目したい。これらの内の半数以上に詞・曲・唄のいずれかのオリジナルメンバーが関わってい

るのも、本歌の存在の大きさを物語るものといえよう。

### 3-3. 祇園の反応

『祇園小唄』に対する様々な反響の中で特筆されるのは、京舞井上流による振付がなされたことである。このことは取りも直さず『祇園小唄』が地元の祇園甲部から認知されたことに他ならず、この曲の長寿であることが、在る意味この時に保証されたともいえよう。四世井上八千代(現井上愛子)は次のように書いている。

私が自分の責任で振付けた曲は、皆さんよくご存じの「祇園小唄」です。

あれは昭和の初め頃だったでしょうか。今も、京都を代表するように親しまれていますが、この唄が出来た頃は大変なもてようでした。軽い、情緒のある唄でしたし、舞妓が舞えるようにわりに簡単に、そして可愛い感じを狙ったものでした。

私は唄を口ずさみながらお掃除をし、箒を動かす合間に振付けました。俗曲で、唄そのものが軽いせいもありましたが、この頃のようにどっかと座って考えられる、ゆとりもなかったのです。(片山慶次郎『井上八千代芸話』河原書店、1967、88頁)

この一文からは、振付がなされた具体的な時期は特定できない。映画の第一話『舞の袖』で、主人公千賀勇が『祇園小唄』を舞うシーンがあるが、タイトルロールに「振付 若柳吉兵衛」とある通り、ここでは若柳流の『京の四季』を舞っているようである<sup>(18)</sup>。続編『狸大尽』では一力の座敷で祇園甲部の舞妓達が『祇園小唄』を舞うシーンがあり<sup>(19)</sup>、こちらは井上流である可能性が十分考えられる。しかし残念ながらフィルムが現存しておらず、振付が井上流のものか確認できていない。今後の調査に期待するところである。

『祇園小唄』は祇園甲部の舞妓の必須レパートリーとなった。さらに今日では弥栄会館ギオンコーナーの、観光客対象の伝統芸能紹介プログラムの中で、「京舞」の親しみやすい代表曲として舞われている。

井上流の『祇園小唄』の伴奏は、当然のこととし

て祇園甲部の地方によるものである。本歌のメロディーは結構シンプルであるが、舞地としての『祇園小唄』は唄い始めを裏拍から入ったり、メロディーを複雑・微妙に変化させることにより、完全に上方唄的に消化されており、本歌とは対照的な仕上がりとなっている。

### 3-4. 祇園から五花街へ

『祇園小唄』は舞妓のレパートリーとして、祇園甲部以外の先斗町、上七軒、宮川町、祇園東の各花街でもそれぞれの流儀による振付けで舞われている。例えば先斗町では、『祇園小唄』の1・2番から『鴨川小唄』の3・4番へ繋ぐ形で、ひとつの演目になっているようだ。<sup>(21)</sup>

この曲が曲名や歌詞を越えて、「京の舞妓」のイメージソングとなっていることは、我々の想像以上の意味を持つことと思われる。平成6年から毎年催されている「京都五花街合同 伝統芸能特別公演」では、『京小唄』『京を慕いて』と共に年替わりで、フィナーレを飾る一曲として使われている。

### 4. 外と内からの共通イメージとして

長田の『祇園夜話』『祇園絵日傘』は8回書肆を変え、昭和28年の段階で117万部を売りつくしたといわれている。<sup>(22)</sup>大正5年に赤木桁平は「遊蕩文学の撲滅」<sup>(23)</sup>を掲げ、長田幹彦、吉井勇、近松秋江らに名指しで痛烈な非難を浴びせた。論の正否はともかく、長田が作り上げた「祇園」のイメージは、この時点ですでに全国の人々の憧れの対象として、広く認識されていたといえるだろう。

この全国的に刷り込まれたイメージは約20年の時を経て、映画主題歌『祇園小唄』に姿を変えて再び人々の前に現れた。唄の地元京都では昭和に入り交通網が次々に整備され、昭和5年には御大典お跡拝観や記念博覧会という大きなイベントが控えていた。この時期全国の行政組織に先駆けて京都市に「観光課」が新設されたことから、観光客獲得に対する当時の大きな期待がうかがえる。<sup>(24)</sup>地方小唄全盛の時代に、まだ自分達の唄を持

っていなかった京都の前に、映画主題歌『祇園小唄』はまさに絶妙のタイミングで登場したといえる。一映画主題歌はたちどころに映画を離れ、人々の期待を背負い京の内外へと発信されたのである。

「京－祇園」への憧れは『祇園小唄』に再び一致点を見出し、描かれたイメージはより強固なものとして再生され、そして人々の意識に深く固定されたといえよう。『祇園小唄』は京都を代表する唄となった。

### 注

- (1) 森垣二郎『レコードと五十年』(河出書房新社、1960) 107-164頁、森本敏克『音盤歌謡史』(白川書院、1975) 15-28頁、岡田則夫「続・蒐集奇談 101回」(『レコード・コレクターズ』6月号、ミュージック・マガジン社、1999) 108-114頁、倉田喜弘『日本レコード文化史』(東京書籍、1979) 241-300頁
- (2) 森本、前掲書、28-29頁
- (3) 倉田、前掲書、333頁
- (4) 拙稿「流行歌『三朝小唄』について」(『アート・リサーチ Vol.2』(立命館大学アート・リサーチセンター、2002) 101-104頁
- (5) 古茂田・矢沢ほか編『新版 日本流行歌史 上』(社会思想社、1994) 101頁
- (6) 長田暁二『わたしのレコード100年史』(英知出版、1978) 44-45頁
- (7) 小田切ほか編『日本近代文学大事典 第二巻』(講談社、1977) 506頁
- (8) 長田暁、前掲書、49頁
- (9) 四世井上八千代監修『京舞井上流歌集』(祇園八坂女紅場学園、1965) 134-135頁
- (10) 平野、上参郷、蒲生編『日本音楽大事典』(平凡社、1989) 846頁
- (11) 相賀編『日本舞踊名曲事典』(小学館、1983) 98-99頁
- (12) 小原源一郎「舞妓の名画」(『祇園 粋な遊びの世界』(淡交社、1995) 83-88頁
- (13) 長田幹彦「わが青春の記」(『京都時代の谷崎君』(長田幹彦全集 別冊』(非凡閣、1936)、谷崎潤一郎『青春時代』(雪月花書房、1948)

- (14)小田切ほか編、前掲書、505頁
- (15)清島利典『日本ミュージカル事始め』(刊行社、1982)283-288頁
- (16)志甫哲夫「佐々紅華の世界」『季刊SPレコード誌 第36号』(アナログ・ルネッサンス・クラブ、2000)84-94頁
- (17)志甫哲夫「続・佐々紅華の世界」『季刊SPレコード誌 37号』アナログ・ルネッサンス・クラブ、2000)80-92頁
- (18)先斗町歌舞会 白井万造氏のご教示による。
- (19)金森万象「映画今昔(32)」『消費者自身』(日本生活協会、1973)
- (20)「祇園小唄」『京都 祇園の唄』(東芝EMI、TH7012(LP)、1965)
- (21)先斗町歌舞会 白井万造氏のご教示による。
- (22)長田幹彦「あとがき」『祇園小唄』(千代田書院、1953)292頁
- (23)赤木桁平「遊蕩文学の撲滅」『読売新聞』1916年8月6・8日
- (24)「観光 40年の回想」(観光40年の回想刊行委員会、1994)7-14頁

**附記** 本稿は、立命館大学アート・リサーチセンター秋季連続講演会 第3回『一無声映画、等持院に還る！—第三弾 甦るマキノ映画』配布資料用解説文を骨子とし、新たに書き下ろしたものである。その際富田美香氏・板倉史明氏より金森万象、マキノ映画に関する資料のご提供を、守田禎治氏より佐々紅華に関する資料のご教示・ご提供を、仲辻秀綱氏より音声資料に関するご教示・ご提供を、白井万造氏より舞踊『祇園小唄』の上演形態に関するご教示を賜った。ここに改めて御礼申し上げます。